様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：４５３１１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2014
課題番号：２１７３０５３５

研究課題名（和文）謝罪発達における個人差の検討ー社会的情報処理理論による謝罪発達メカニズムの解明ー

研究課題名（英文）Individual differences in apology development : Elucidation of the mechanism by Social information-processing theory

研究代表者
芝■　美和（SHIBASAKI, Miwa）

新見公立短期大学・その他部局等・講師

研究者番号：００４１３５４２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：表象過程に注目した研究1・2では，6歳頃には過去に謝罪したかに関わらず，新規謝罪情報に基づいて加害児の行動や特性を判断することが明らかとなり，同様の傾向が児童を対象とした研究3でも確認された。符号化・表象過程に着目した研究4・5では，被害児の表情がネガティブな場合に比べてポジティブな場合，幼児の謝罪，補償行動の選択率が減少するが，6歳児になると，被害児の表情がポジティブであっても被害児の感情を推測するよう促すことで謝罪や補償行動の選択率が高まることが示された。反応決定過程に注目した研究6では，謝罪された被害児の感情や行動を予測するよう促す介入は，加害児の謝罪や告白を動機づけることが確認された。

研究成果の概要（英文）：6 studies are reported that concern social information processing and moral behavior including apology. In Study 1, 2, 3 focused on representation process, results indicated that 6-year-old and 8-12-year-old children predicted the perpetrators' behavior and moral traits on the basis of new apology information whether they apologized or not in previous conflict situations. In Study 4, 5, which focused on encoding process, results indicated that 4-6-year-old children selected more egocentric problem solving strategies and less moral strategy when victims displayed positive emotion than negative emotion. However 6-year-old children answered more moral strategies as actor’s behaviors with the intervention that promoted them to infer victim’s negative emotion. Study 6 focused on response decision process revealed that 4-6-year-old children were more likely to select apology as actor’s behavior when they were encouraged predicting victim’s emotion and behavior when they were apologized.

研究分野：発達心理学

キーワード：謝罪行動　社会的情報処理理論　道徳性　役割取得　感情理解　罪悪感

１．研究開始当初の背景

従来の謝罪研究では，主に謝罪生起頻度や謝罪効果の認識，謝罪のタイプについての研究知見が得られてきた。特に謝罪のタイプについては，罪悪感を伴う誠実な謝罪は道具的謝罪に比べ，加害児の行動改善や再犯防止に大きな効果を持つことから，近年，高い関心を集めるようになった。一方，謝罪発達における個人差についての研究知見はほとんど得られていない。個人差を検討する際に有用な理論に社会的情報処理理論がある。これは，符号化，表象・解釈，反応検索，反応決定，実行の５過程から人間の行動を説明するものであり，この理論に基づく教育プログラムも多く存在する。謝罪を選択，実行するに至るプロセスを本理論によって解明することは，対人葛藤やいじめ問題に関する介入の手立てを講じる上で有用であろう。

２．研究の目的

社会的情報処理理論の５つの過程のうち，(1)符号化，(2) 表象・解釈過程，(3)反応決定の３点に焦点を当てる。研究１・２・３では，(2)表象・解釈過程において，記憶データベース内の過去の謝罪情報と新規謝罪情報の処理が謝罪選択にもたらす影響を検討する。研究４・５では，(1)符号化過程，(2)表象・解釈過程における表情情報の処理と謝罪との関連性を明らかにする。研究６では，(3)反応決定過程における結果の予見性と謝罪との関連性を検討する。

３．研究の方法

(1)表象過程における記憶データベースの活用と新規情報の処理

①謝罪についての過去情報と新規情報が加害児に関する道徳判断と謝罪予測に及ぼす影響－謝罪あり過去情報を持つ加害児に関する幼児の推測（研究１）

調査対象児：４歳児 41 名，５歳児 38 名，6 歳児 46 名であった。

手続き：調査は個別に実施した。調査対象児を新規謝罪情報あり群となし群に分けた。新規謝罪情報あり群には，「加害児は違反後にいつも被害児に謝る」という過去の謝罪情報に関する教示文１を提示した後，加害児に対する道徳判断（よい子/悪い子）を求め，回答の程度を 3 段階で尋ねた。その後，物の取り去りについての課題文を提示し，加害児に対する道徳判断と加害児の謝罪についての予測（謝罪する/しない）を求め，回答の程度を 3 段階で尋ねた。最後に「加害児は被害児に謝罪した」という新規の謝罪情報に関する教示文２を提示し，加害児に対する道徳判断と加害児の謝罪についての予測を求め，回答の程度を３段階で尋ねた。新規謝罪情報なし群に対する手続きについては，教示文２が「加害児は違反後に一度も謝ったことがない」となる以外は新謝罪情報あり群と同様である。

②謝罪についての過去情報と新規情報が加害児に関する道徳判断と謝罪予測に及ぼす影響－謝罪なし過去情報を持つ加害児に関する幼児の推測（研究２）

調査対象児：4 歳児 41 名，5 歳児 38 名，6 歳児 46 名であった。

手続き：調査は個別に実施した。調査対象児を予め，新規謝罪情報あり群となし群に分けた。両群に対する調査手続きは，「加害児は違反後に被害児に謝ったことが一度もない」という過去の謝罪情報に関する教示文を提示することを除けば，研究１と同様である。

③加害児の謝罪情報が加害児の特性および行動についての児童の予測に与える影響（研究３）

調査対象児:小学２年生 86 名,4 年生 86 名，6 年生 66 名であった。

手続き：質問紙による一斉調査を実施した。調査対象児を予め，過去謝罪なし－新規謝罪なし群（Ａ群），過去謝罪なし－新規謝罪あり群（Ｂ群），過去謝罪あり－新規謝罪なし群（Ｃ群）に分けた。加害児について過去の謝罪情報に関する教示文（加害児は違反後に常に謝罪する/謝罪したことがない）を提示した後，物の取り去りについての課題文を示し，新規謝罪情報に関する教示文（加害児は謝罪した/謝罪しなかった）を示した。続いて，類似場面における謝罪の有無（加害児が謝罪するか否か）と加害児についての道徳判断（よい子/悪い子）に関する質問を実施した。

(2) 符号化・表象過程における表情情報の処理と介入の効果

①被害児の表情が加害児の謝罪に及ぼす影響（研究４）

調査対象児：4 歳児 39 名，5 歳児 40 名，6 歳児 41 であった。

手続き：調査は個別に実施した。調査対象児をネガティブ表情群とポジティブ表情群に分けた。物の持ち去りについての課題文と被害児の表情に関する教示文（ネガティブ/ポジティブ）を提示した後，①加害児の行動について自由回答を求めた。その後，「加害児はこの後謝罪した」という挿入文を示し，②罪悪感，③補償行動，④違反の繰り返し抑制について二者択一で回答を求めた。

②他者感情推測が幼児の謝罪に及ぼす影響（研究５）

調査対象児：5 歳児 40 名，6 歳児 40 名であった。

手続き：調査は個別に実施した。調査対象者を予め，他者感情推測あり群となし群の 2 群に分類した。まず，物の取り去り場面で笑顔の被害児に加害児が謝罪したという課題文を提示した。その後，他者感情推測あり群のみ，「このとき被害児はどんな気持ちだと思う？」と，ポジティブな表情を示す被害児の感情を推測するよう求めた。続いて，両群に対し，①加害児の行動について自由回答を求め，②罪悪感，②補償行動，④違反の繰り返し抑制について３段階で評定するよう求めた。

(3) 反応決定過程における結果予測と謝罪との関連（研究６）

調査対象児：4 歳児 40 名，5 歳児 41 名，6

歳児 42 名であった。

手続き：調査は個別に実施した。調査対象児を予め結果予測あり群と結果予測なし群に分類し，結果予測あり群には，視点取得課題と違反課題を実施し，結果予測なし群には違反課題のみを実施した。課題文は，被害児の所有する人形を，被害児を含め誰も見ていない状況で，加害児が壊してしまうというものであり，Barrett ら(1993)を参考に作成した。

【視点取得課題】課題文を提示した後，①加害児が違反を告白し謝罪した場合の被害児の感情と②加害児が謝罪した後の被害児の行動を自由回答で求めた。

【違反課題】課題文を提示した後，①加害児の行動予測を自由回答で求め，②罪悪感と③違反の繰り返し抑制の程度を 3 段階で求めた。

４．研究成果

(1) 表象過程における記憶データベースの活用と新規情報の処理

①謝罪についての過去情報と新規情報が加害児に関する道徳判断と謝罪予測に及ぼす影響－謝罪あり過去情報を持つ加害児に関する幼児の推測（研究１）

「違反後にいつも謝罪した」という過去の謝罪情報を持つ加害児について，幼児に以下の判断，予測を求めた。

【謝罪特性を持つ加害児に対する道徳判断】

加害児に関して，良い子か悪い子のいずれかを選択するよう求め，その程度を各 3 段階で尋ねたものを第 1 道徳得点とした。幼児の善悪判断の程度に，年齢が影響するかについて 1 要因の分散分析を行ったところ，年齢の主効果が有意であった。ボンフェローニの検定を行った結果，４歳児よりも 6 歳児の得点が有意に高いことが示された。

【謝罪特性を持つ加害児に対する対人葛藤後の道徳判断】加害児について，新たに違反を犯したときの道徳判断を幼児に求めた。良い子か悪い子かのいずれかを選択するよう求め，その程度を各 3 段階で尋ねたものを第 2 道徳得点とした。第 2 道徳得点の高さに年齢が関連するかについて 1 要因の分散分析を行った結果，年齢の主効果が有意であった。ボンフェローニの検定を行ったところ，4 歳児よりも 5 歳児の得点が有意に高かった。

【謝罪特性を持つ加害児に対する対人葛藤後の謝罪予測】加害児が，新たな違反後に謝罪を選択するか否かを幼児に予測するよう求め，その程度を各 3 段階で尋ね，第 1 謝罪得点を算出した。第 1 謝罪得点に年齢による違いが見られるかを明らかにするために 1 要因の分散分析を行った結果，有意な年齢差は見られなかった。

Table 1 各群における幼児の反応

		謝罪あり－謝罪あり群（研究1）	謝罪あり－謝罪なし群（研究1）	謝罪なし－謝罪あり群（研究2）	謝罪なし－謝罪なし群（研究2）
第1道徳得点	4歳児	1.68(1.86)	1.48(2.35)	-1.55(2.24)	-1.56(2.55)
	5歳児	2.33(1.84)	2.33(1.69)	-2.42(1.74)	-2.42(1.23)
	6歳児	2.81(1.35)	2.81(1.25)	-2.39(1.72)	-2.29(1.28)
第2道徳得点	4歳児	-1.22(2.23)	-1.28(2.49)	-1.22(1.99)	-1.62(2.35)
	5歳児	-1.39(2.23)	-1.39(2.13)	-1.68(1.65)	-2.37(1.84)
	6歳児	-1.38(2.45)	-1.63(2.21)	-2.38(1.48)	-2.53(1.98)
第3道徳得点	4歳児	1.62(2.63)	1.28(2.21)	1.32(2.16)	1.23(2.56)
	5歳児	2.11(1.79)	2.18(1.23)	1.64(2.39)	2.26(1.36)
	6歳児	2.72(1.97)	1.76(2.39)	2.22(1.85)	2.19(1.96)
謝罪予測1得点	4歳児	1.22(2.94)	1.48(2.23)	-1.14(2.61)	-1.22(2.42)
	5歳児	1.62(2.91)	1.92(1.98)	-1.72(2.51)	-1.32(2.85)
	6歳児	1.38(2.72)	1.76(2.64)	-1.38(2.38)	-1.38(2.72)
謝罪予測2得点	4歳児	1.14(2.38)	1.38(1.85)	1.24(2.42)	-1.14(2.42)
	5歳児	1.42(2.62)	1.79(2.22)	-1.53(2.11)	-1.13(2.72)
	6歳児	2.12(1.61)	-1.12(2.95)	2.84(1.94)	-1.72(2.42)

（ ）内は標準偏差

【謝罪特性を持つ加害児についての善悪判断に新規謝罪情報が及ぼす影響】加害児に対する幼児の道徳判断に，新規謝罪情報が影響するか否かを検討するため，謝罪教示文を提示した後に，加害児が良い子か悪い子かを各 3 段階で求め，第 3 道徳得点を算出した。第 3 道徳得点に年齢と新規謝罪情報による違いが見られるか否かについて，年齢（3：4，5，6 歳児）×新規謝罪情報群（2：謝罪あり，なし）の 2 要因分散分析を実施した。新規謝罪情報群の主効果と年齢×新規謝罪情報群の交互作用が有意であったため，ボンフェローニの検定による多重比較を行った結果，5・6 歳児では新規謝罪なし群よりも新規謝罪あり群の得点が有意に高く，新規謝罪あり群では 4 歳児より 6 歳児の得点が有意に高かった。

【謝罪特性を持つ加害児についての謝罪予測に新規謝罪情報が及ぼす影響】過去の謝罪特性情報を持つ加害児の謝罪についての幼児の予測に，新規謝罪情報が影響するかを確認するために，新たな違反後に加害児が謝罪するか否かを尋ね，その程度を各 3 段階で求め，第 2 謝罪得点とした。第 2 謝罪得点について年齢（3：4，5，6 歳児）×新規謝罪情報群（2：謝罪あり，なし）の 2 要因分散分析を行った結果，年齢×新規謝罪情報群の交互作用が有意であった。ボンフェローニの検定を用いた多重比較を実施したところ，6 歳児では新規謝罪なし群よりも新規謝罪あり群の得点が有意に高いことが示された。

②謝罪についての過去情報と新規情報が加害児に関する道徳判断と謝罪予測に及ぼす影響－謝罪なし過去情報を持つ加害児に関する幼児の推測（研究２）

「違反後に謝罪したことがない」という過去の謝罪情報を持つ加害児について，幼児に以下の判断，予測を求めた。

【謝罪特性を持つ加害児に対する道徳判断】

加害児について良い子か悪い子のいずれかを選択するよう求め，その程度を各 3 段階で尋ねたものを第 1 道徳得点とした。第 1 道徳判断得点に年齢による違いが見られるかについて 1 要因の分散分析を行ったところ，年齢の主効果が有意であった。ボンフェローニの検定を行った結果，４歳児よりも 6 歳児の得点が有意に高かった。

【謝罪特性を持つ加害児に対する対人葛藤後の道徳判断】新たに違反を犯した加害児について，良い子か悪い子かのいずれかを選択するよう幼児に求め，その程度を各 3 段階で尋ねたものを第 2 道徳得点とした。第 2 道徳得点の高さに関して年齢に関する 1 要因分散分析を行ったところ，年齢の主効果が有意であった。ボンフェローニの検定を行ったところ，4 歳児よりも 5・6 歳児の得点が有意に高いことが示された。

【謝罪特性を持つ加害児に対する対人葛藤後の謝罪予測】加害児が新たな違反後に謝罪

を選択するか否かを幼児に予測するよう求め，その程度を各 3 段階で尋ねたものを第 1 謝罪得点とした。第 1 謝罪得点が年齢によって異なるかについて 1 要因の分散分析を行ったが，有意な年齢差は見られなかった。

【謝罪特性を持つ加害児についての善悪判断に新規謝罪情報が及ぼす影響】加害児に対する幼児の道徳判断に，新規謝罪情報が影響するか否かを検討するため，謝罪教示文を提示した後に，加害児が良い子か悪い子かを各 3 段階で求めたものを第 3 道徳得点とした。第 3 道徳得点について，年齢（3：4，5，6 歳児）×新規謝罪情報群（2：謝罪あり，謝罪なし）の 2 要因分散分析を実施したところ，年齢の主効果($F(2, 119) = 4.49$, $p < .05$)，新規謝罪情報群の主効果($F(1, 119) = 80.24$, $p < .01$)が有意であり，年齢×新規謝罪情報群の交互作用($F(2, 119) = 2.90$, $.05 < p < .10$)に有意傾向が見られた。ボンフェローニの検定を用いた多重比較を行ったところ，5 歳児よりも 4 歳児，新規謝罪なし群よりもあり群の得点が有意に高く，新規謝罪なし群では 5 歳児に比べ 4 歳児の得点が有意に高かった。

【謝罪特性を持つ加害児についての謝罪予測に新規謝罪情報が及ぼす影響】加害児の謝罪についての幼児の予測に，新規謝罪情報が影響するかを確認するために，新たな違反後に加害児が謝罪するか否かを尋ね，その程度を各 3 段階で求め，第 2 謝罪得点とした。第 2 謝罪得点について年齢（3：4，5，6 歳児）×新規謝罪情報群（2：謝罪あり，謝罪なし）の 2 要因分散分析を行った結果，新規謝罪情報の主効果($F(1, 119) = 7.26$, $p < .01$)と年齢×新規謝罪情報群の交互作用($F(2, 119) = 6.34$, $p < .01$)が有意であった。ボンフェローニの検定による多重比較を実施したところ，6 歳児では新規謝罪なし群よりも新規謝罪あり群の得点が有意に高いことが明らかになった。

③加害児の謝罪情報が加害児の特性および行動についての児童の予測に与える影響

【加害児の謝罪についての児童の予測】児童が加害児の謝罪を予測する程度に年齢と謝罪情報群による違いが見られるかについて，逆正弦変換法を用いた分散分析を行ったところ，年齢の主効果($\chi^2(2) = 14.09$, $p < .01$)，謝罪情報群の主効果($\chi^2(2) = 89.36$, $p < .01$)，年齢×謝罪情報群の交互作用($\chi^2(4) = 30.21$, $p < .01$)が有意であった。ライアン法による多重比較を行った結果，加害児が謝罪すると予測した者は，A群，C群，B群の順で多いことが明らかになった。謝罪情報群における年齢の単純主効果と年齢における謝罪情報群の単純主効果がともに有意水準に達し，加害児が謝罪すると予測した者は，A群では 4 年生，6 年生，2 年生の順で多く，C群では 6 年生よりも 4 年生で多く，2･6 年生ではA・C群よりもB群，4 年生ではA群，C群，B群の順で多かった。

【加害児に対する道徳判断】加害児がよい子か悪い子かという道徳判断に，年齢と謝罪情報群による違いが見られるかを明らかにするために，逆正弦変換法を用いた分散分析を行った。分析の結果，謝罪情報群の主効果($\chi^2(2) = 62.12$, $p < .01$)と年齢×謝罪情報群の交互作用($\chi^2(2) = 18.72$, $p < .01$)が有意であった。ライアン法による多重比較を行った結果，加害児を「よい子」であると判断した者は，A群よりもC群，C群よりもB群で多かった。また，謝罪情報群における年齢の単純主効果と年齢における謝罪情報群の単純主効果がともに有意であり，加害児が「よい子」であると判断した者は，A群では 4 年生よりも 2 年生，C群では 6 年生よりも 4 年生で多く，2 年生ではA群よりもB群，4 年生ではA群，C群，B群の順で，6 年生ではA・C群よりもB群で多かった。

以上のことから，加害児の道徳特性と謝罪行動についての幼児の予測に，謝罪に関する過去および新規情報が影響することが示された。具体的には，過去に謝罪した加害児については，「新たな違反場面で謝罪した」という新規謝罪情報による影響は，道徳判断に関しては 5 歳頃から，謝罪の予測に関しては 6 歳児において確認された。他方，過去に謝罪しなかった加害児については，「新たな違反場面で謝罪しなかった」という新規謝罪情報による影響を道徳判断において強く受けるのは 4 歳児であり，反対に「新たな違反場面で謝罪した」という新規謝罪情報による影響を謝罪予測において受けるのは 6 歳児になってからであることが示された。6 歳児における結果は児童期においても支持され児童期では，過去に謝罪したか否かにかかわらず，新たな違反場面で謝罪することが，類似場面における加害児の謝罪を予測し，加害児を「よい子」であると判断する上では重要であるといえる。一方，加害児の行動予測や善悪判断に謝罪に関する新規情報がもたらす影響力が児童期中期において顕著になる原因に関しては本研究では明らかにされなかった。謝罪についての新規情報と過去情報の処理が発達的にどのようなプロセスを辿るかについては今後の重要な検討課題である。

(2) 符号化・表象過程における表情情報の処理と介入の効果

①被害児の表情が加害児の謝罪に及ぼす影響

【加害児の行動予測に及ぼす被害児の表情の影響】加害児の行動についての幼児の回答

Table 2 学年と条件による児童の反応の違い

	2年生			4年生			6年生		
	A条件	B条件	C条件	A条件	B条件	C条件	A条件	B条件	C条件
よい子	4(14)	12(44)	7(23)	0(0)	20(71)	12(41)	1(7)	15(56)	2(8)
悪い子	24(86)	15(56)	24(77)	29(100)	8(29)	17(59)	13(93)	12(44)	23(92)
謝罪する	15(54)	25(93)	18(58)	0(0)	25(89)	20(69)	3(21)	21(78)	8(32)
謝罪しない	13(46)	2(7)	13(42)	29(100)	3(11)	9(31)	11(79)	6(22)	17(68)

( )内は%

Table 3 年齢と表情群による幼児の反応の違い

	4歳児		5歳児		6歳児	
	ネガティブ表情	ポジティブ表情	ネガティブ表情	ポジティブ表情	ネガティブ表情	ポジティブ表情
謝罪・補償行動	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
自己中心的方略	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
わからない・忘れもしない	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

( )内は%

Table 4 他者感情推測に関する介入の有無による被害児の感情についての幼児の予測の違い （人）

	5歳児		6歳児	
	他者感情推測あり群	他者感情推測なし群	他者感情推測あり群	他者感情推測なし群
謝罪・補償行動	11(55)	6(30)	17(85)	11(55)
自己中心的行動	7(35)	5(25)	3(15)	3(15)
分からない・何もしない	2(10)	9(45)	0(0)	6(30)

（）内は%

を 3 カテゴリー（①謝罪・補償行動，②自己中心的方略，③分からない・何もしない）に分類し，カテゴリー別に年齢（3：4，5，6 歳児）×被害児の表情（2：ネガティブ，ポジティブ）の逆正弦変換法を用いた分散分析を行った。①謝罪・補償行動に関しては，表情の主効果が有意であり($\chi^2(1) = 17.02$, $p < .01$)，年齢の主効果に有意傾向が見られた($\chi^2(2) = 6.11$, $.05 < p < .10$)。下位検定の結果，謝罪・補償行動の回答は，4 歳児よりも 6 歳児，ポジティブ表情群よりもネガティブ表情群で多かった。②自己中心的方略については年齢の主効果が有意であり($\chi^2(2) = 7.56$, $p < .05$)，下位検定の結果，6 歳児よりも 4 歳児における回答が多かった。③分からない・何もしないに関しては，表情の主効果が有意であり($\chi^2(1) = 29.95$, $p < .01$)，ネガティブ表情群よりポジティブ表情群での回答が多かった。

【謝罪後の加害児の認識に及ぼす被害児の表情の影響】罪悪感，補償行動，違反の繰り返し抑制についての幼児の回答に関して，各々年齢（3：4，5，6 歳児）×被害児の表情（2：ﾈｶﾞﾃｨﾌﾞ，ﾎﾟｼﾞﾃｨﾌﾞ）の逆正弦変換法を用いた分散分析を行った。罪悪感に関して年齢×被害児の表情の交互作用に有意傾向が見られたため($\chi^2(2) = 5.75$, $.05 < p < .10$)，被害児の表情における年齢の単純主効果の検定を行ったところ，ネガティブ表情群における年齢の単純主効果が有意であった。ライアン法による多重比較を行った結果，ネガティブ表情群では，5 歳児に比べて 6 歳児の方が，被害児に罪悪感を認識すると回答した者が有意に多かった。さらに，5 歳児における被害児の表情の単純主効果が有意であり，5 歳児ではネガティブ表情群よりもポジティブ表情群において，被害児に罪悪感を認識する回答した者が有意に多かった。違反の繰り返し抑制に関しては，年齢の主効果が有意であり($\chi^2(1) = 16.44$, $p < .01$)，下位検定の結果，違反の繰り返しを抑制すると回答した者は 4 歳児よりも 5･6 歳児の方が有意に多かった。

②他者感情推測が幼児の謝罪に及ぼす影響

【ポジティブな表情を示す被害児の感情についての幼児の理解】 他者感情推測あり群に対してポジティブな表情を示す被害児の感情を推測するよう求め，回答を 2 カテゴリー（ネガティブ感情，ポジティブ感情）に分け，年齢別に 2 項検定を用いて分析したところ，両年齢ともにポジティブ感情よりもネガティブ感情の回答が多かった(ともに $p < .01$)。

【他者感情推測が加害児の行動についての幼児の予測に与える影響】加害児の行動についての回答を 3 カテゴリー（①謝罪・補償行動，②自己中心的方略，③分からない・何もしない）に分類し，各カテゴリーにおける幼児の回答に他者感情推測の有無による違いが見られるかについて，年齢ごとに χ^2 検定を行ったところ，6 歳児については他者感情推測による回答の偏りが有意であった($\chi^2(2) = 7.29$, $p < .05$)。残差分析の結果，他者感情推測あり群では①謝罪・補償行動カテゴリーの残差がプラスに有意であり，③分からない・何もしないカテゴリーの残差がマイナスに有意であった。反対に，他者感情推測なし群では②分からない・何もしないカテゴリーの残差がプラスに有意であり，①謝罪・補償行動カテゴリーの残差がマイナスに有意であった。5 歳児に関しても，他者感情推測による回答の偏りが有意であり($\chi^2(2) = 6.29$, $p < .05$)，残差分析を行ったところ，③何もしない・分からないカテゴリーについては，他者感情推測なし群における残差がプラスに有意であり，反対に，他者感情推測あり群における残差がマイナスに有意であった。

【他者感情推測が加害児の罪悪感，補償行動，違反の繰り返し抑制についての幼児の予測に与える影響】質問②～④に対する回答から，罪悪感得点，補償行動得点，違反の繰り返し抑制得点を算出し，各得点が他者感情推測の有無によって異なるか否かについて年齢別に t 検定を行ったが，いずれの得点についても群による有意な得点差は見られなかった。

以上のことから，被害児の表情がネガティブな場合に比べてポジティブな場合，幼児の謝罪，補償行動の選択率が減少すること，被害児の表情がポジティブであるとき，被害児の感情を推測するよう求める介入の効果は 5 歳児から認められるが，年齢によって効果の示され方が異なり，5 歳児では，被害児の感情推測によって，何をすべきかわからないといった違反後の困惑が減少されるのみであったのに対し，6 歳児では違反後の困惑が減少され，かつ謝罪や補償行動が動機づけられることが明らかになった。

(3) 反応決定過程における結果予測と謝罪との関連（研究６）

【被害児の感情についての幼児の予測】加害児が謝罪した際の被害児の感情についての回答を 2 カテゴリー（①ポジティブ感情，②ネガティブ感情）に分類し χ^2 検定したところ，人数の偏りに有意傾向が見られた($\chi^2(2) = 5.26$, $.05 < p < .10$)。残差分析の結果，6 歳児では 4・5 歳児に比べ，加害児の謝罪を受けた被害児の感情について，ポジティブな感情を予測する者が多く，ネガティブな感情を予測する者が少ない傾向にあった。

【被害児の行動についての幼児の予測】謝罪を受けた被害児がその後どのような行動を示すかを予測するよう求め，回答を①許容，②非許容，③その他・分からないの 3 カテゴリーに分類し χ^2 検定した結果，年齢による有意な人数の偏りは見られず，いずれの年齢児も謝罪後に加害児を許容すると回答した

者が多かった。
【謝罪結果の予測が加害児の問題解決方略にもたらす影響】加害児の行動予測についての調査対象児の回答を①謝罪・告白と②自己中心的方略の 2 カテゴリーに分類し，各カテゴリーにおける回答が年齢と被害児の視点取得に関する介入の有無によって異なるか否かについて年齢（3；4・5・6 歳児）×介入（2；あり・なし）の逆正弦変換法を用いた分散分析を行った。分析の結果，謝罪については年齢の主効果($\chi^2(2) = 6.69$, $p < .05$)と介入の主効果($\chi^2(1) = 18.44$, $p < .01$)が有意であり，下位検定を行ったところ，謝罪・告白を多く回答した者は，5 歳児よりも 6 歳児，介入なし群よりもあり群で多かった。自己中心的方略については，年齢の主効果($\chi^2(2) = 6.69$, $p < .05$)と介入の主効果($\chi^2(1) = 18.44$, $p < .01$)が有意であり，下位検定の結果，6 歳児よりも 5 歳児，介入あり群よりもなし群において回答が多かった。
【罪悪感の認識と違反の繰り返し欲求の抑制における介入の効果】質問②，③に対する回答から，罪悪感得点と違反の繰り返し抑制得点を算出し，各得点について年齢（3；4・5・6 歳児）×介入（2；あり・なし）の 2 要因分散分析を行ったところ，罪悪感得点について年齢の主効果に有意傾向が見られ($F(2, 115) = 2.50$, $.05 < p < .10$)，4 歳児よりも 6 歳児の得点が有意に高い傾向にあった。違反の繰り返し抑制得点についても，年齢の主効果が有意であり($F(2, 115) = 14.29$, $p < .01$)，4・5 歳児よりも 6 歳児の得点が有意に高かった。
以上の結果から，加害児に，被害児の視点から謝罪された被害児の感情や行動を予測するよう促す介入は，加害児が自己中心的方略ではなく謝罪や告白を選択するよう動機づけるという点において有用であることが示された。一方，罪悪感や違反の繰り返し抑制など加害児の認識を変容しないなどという，介入による効果の限界，課題も示された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 3 件）

①芝﨑美和：被害幼児の表情と加害幼児の意図性が保育者の介入行動に与える影響：保育者養成校の学生による予測，幼年教育研究年報，査読有, 33, 79-88,2011.
②芝﨑美和：被害児の感情確認と加害児の意図性が保育学生の介入行動についての認識に与える影響：感情表出に問題のある幼児への対応，幼年教育研究年報，査読有，34, 53-61, 2012.
③芝﨑美和・山崎晃：視点取得を促す介入は幼児の謝罪を動機づけるか．乳幼児教育学研究，査読有, 22, 31-40, 2013.

〔学会発表〕（計 10 件）

①芝﨑美和：表情および状況を手がかりとした介入行動－誠実な謝罪を促す要因の検討－．日本教育心理学会第53回大会，北海道立道民活動ｾﾝﾀｰかでる 2・7.
②芝﨑良典・芝﨑美和：幼児期における「聞く」力の発達的変化．日本教育心理学会第 53 回大会，北海道立道民活動ｾﾝﾀｰかでる 2・7.
③芝﨑美和：被害児の感情と加害児の意図性が保育学生の介入行動に与える影響－感情表出に問題のある幼児への対応．日本発達心理学会第 23 回大会，名古屋国際会議場.
④芝﨑良典・芝﨑美和：絵本の読み聞かせにおける幼児の注意維持．日本発達心理学会第 23 回大会，名古屋国際会議場.
⑤芝﨑美和：謝罪に関する過去情報が児童による他者の内的特性理解に与える影響．第 24 回日本発達心理学会大会，明治学院大学, 2013.3.17.
⑥芝﨑美和，山崎晃：被害児の表情が幼児の問題解決方略に与える影響．日本発達心理学会第 25 回大会，京都大学（京都市），2014. 3. 21.
⑦芝崎良典，段田真那，芝﨑美和　母子相互作用の観察が役割取得能力の向上に及ぼす影響．日本発達心理学会第 25 回大会，京都大学（京都市），2014. 3. 21
⑧芝﨑美和，山崎晃：加害児の謝罪意志による謝罪介入の効果の違い．日本教育心理学会第 56 回総会，神戸国際会議場（神戸市），2014.11.7.
⑨芝﨑美和，山崎晃：幼児の謝罪と他者感情推測との関連－被害児のポジティブな表情による影響力の検討－．日本発達心理学会第 26 回大会，東京大学（東京都），2015.3.20.
⑩芝崎良典，芝﨑美和：注意の制御と向社会的行動との関連．日本発達心理学会第 26 回大会，東京大学（東京都），2015.3.21.

〔図書〕（計 6 件）

①芝﨑美和：幼児の謝罪と罪悪感．湯澤正通，杉村伸一郎，前田健一（編），心理学研究の新世紀３　教育・発達心理学，ミネルヴァ書房, 2012, 238-257.
②芝﨑美和：子どもの言葉の世界とあそび．大橋喜美子（編），理論と子どもの心を結ぶ保育の心理学，保育出版社, 2012, 113-116.
③芝﨑美和：子どもをみるまなざし．澤津まり子,木暮朋佳，芝﨑美和，田中卓也（編），保育者への扉．建帛社, 2012, 40-45.
④青井倫子，青木克仁，飯野祐樹，芝﨑美和他 88 名，小田豊，山崎晃監修，七木田敦，杉村伸一郎，中坪史典，他 2 名編集：幼児学用語集．北大路書房，2013.
⑤芝﨑美和：第 3 章　大人－子ども関係と子どもの社会化：社会化の諸理論，第 4 章　大人－子ども関係の捉え直しと再編．湯澤正通（編），教師教育講座第 3 巻　子どもの発達と教育，協同出版，2014, 37-45，49-58.
⑥芝﨑美和:第 10 章 3 節　心や身体の何が，どのように成長するか－発達の諸相－．小林芳郎（編），新しい心理学へのアプローチ，保育出版社，2014, 122-125.

６．研究組織

(1)研究代表者

芝﨑美和（SHIBASAKI, Miwa）
研究者番号：００４１３５４２